



NPO 立学校の存在感と公益性

～ホールスクール（機関包括型）アプローチで培う持続可能な学校文化～

吉田 敦彦（本校顧問、大阪府立大学教授・E S D重点校形成事業委員）

NPO立学校が活躍する文科省委託事業の研修会

昨年（2016年）の9月から、面白いことが始まった。全国から選定された19校の国公立学校と私立学校1校と並び、NPO立学校4校が加わった24校が、文科省委託事業の研修会に集い、学び合いをはじめたのだ。各校の校長プラス担当教員が集まった第一回研修会では、ワイワイがやがやと全員が参加型のワークショップに汗だくで取り組み、最後に挨拶した文科省のキャリア担当官も興奮気味に、こんな校長参加の研修会は見ることがない、思い切って多様な学校を選定してもらってよかった、新しいことが始まったという実感がある、応援していきたいと熱く語って喝采を浴びた。

それが他にもない、サステナブルスクール（E S D重点校）の研修会。さすがユニークな基準で公募選定された24校だと、参加者のアクティブに学ぶ姿に感じ入った。解説に入る前に、面白かったエピソードを二つ紹介する。

初回、スーツにネクタイ姿の参加者も多い中、NPO立校からの参加者（そもそも「校長」はいない）は皆がとてもラフな格好。中でも、某校の汗かきなS.N.先生は、ポロシャツに首かけタオル姿。究極のクールビズ。最初は浮いてるかな、とも思えたけれど、ワークショップ「サステナブルな校舎環境づくり」で、エネルギー・（冷暖房）電力節減が話題になると、それこそ日常実践の雄姿に映った。

ワークショップ『サステナブルな学校運営』（ファシリテーターは筆者が担当）では、学校が工夫しているアイデアをシェアし合った。たとえば、紙の資料を節減するために全員タブレット持参。疲れる長い職員会議を短くする工夫（報告事項はポータル提示のみで省略する等）。会議外でのコミュニケーションのためのカフェ・コーナーの設置。等々の事例が続くなか、シュタイナー学校の先生からは、「教員会議中に皆で歌をうたう」「教員同士でお誕生日を祝い合う」といった工夫（？）が出て、「そ

んなのもアリか！」と大いに受けていた。

京田辺と横浜と東京賢治の3つのシュタイナー学校（そして、残るもう一つのNPO立の箕面こどもの森学園）の先生は、研修会の度に持ち味が出て、早やサステイナブルスクールの仲間にとってなくてはならない存在。また、その異質な個性（？）を受け容れて学び合うことのできる一般校の先生たちも、その柔軟性に敬意を抱く。では、どうしてこういう素敵な24校が集まることができたのか。

「サステイナブルスクール」とは

この『ESD重点校形成事業』の事業推進委員として、選考基準の作成や審査、研修の企画を担ってきた立場から、サステイナブルスクールについて紹介したい。そのうえで最後に、本校の学校づくりに関わった一人として、今の思いの一端を語ってみたい。

ユネスコアジア文化センター（以下、ACCU）が文科省から受託している日本ユネスコパートナーシップ事業のなかで、“ユネスコスクール”だけでなく、新たに“サステイナブルスクール”と呼ぶESD重点校を公募して選定しよう、そしてそれを支援し育成しよう、という企画に公費助成が付いたのは、2016年の春。縁あって、その事業を推進する委員の委嘱が手元に届いた。受諾する会合で、次のような二つの要望を出した。一条校に限らずNPO法人立のような教育機関も含んだ多様な校種を募集対象とすること、思い切って既成に枠に収まらない刷新的な選考基準をつくって、潜在力の高い魅力的な学校を集めること。この要望は、歓迎された。というのも、「ユネスコスクール」が1000校を超えるまでに量的に拡大した一方で、一つひとつの学校のクオリティが問題視されるようになった状況のなか、「サステイナブルスクール」には、その二番煎じにならず、むしろユネスコスクールを牽引していくような先導的役割が期待されていたからである。

8つのコンセプト（選考基準）

事業推進委員で決めた選考基準は、次の8つ。この基準は選定後も、サステイナブルスクールとして大切にすべき方向を示すコンセプトでもあるので、あらためて研修会で共有した。その際、ポイントを紹介する役割は筆者が担当し、次のような点を強調した。

1. ビジョン (Vision)

「ビジョン」は、「達成目標」(Goal/End)ではない。到達地点ではなく、追い求めていく方向性。数値化できない、ビジュアルなイメージ（まさに「夢（ドリーム）」のように）。自分の外から与えられるものではなく、自分の内から湧き上がってくるもの。

2. 継続性 (Continuity)

一時の流行ではなく、持続する不易なるもの。熱心な先生が異動になっても学校として続けていく意志と体制があるか。持続可能な社会をつくる以前に、学校の日々の教育活動そのものが持続可能かどうか。

3. 総合性・バランス (Integration)

教育活動の全体のなかに、ESD の様々な側面がバランスよく統合されているか。教科のなかの断片的な知識ではなく、有機的に関連付けられた総合的な学びとなっているか。

4. 前に踏み出す (Empowerment)

外からの要請ではなく、自らの内発的な力に従って、前に踏み出しているか。外発的ではなく、内発的な展開。支援がなくなっても、あとは自ら前へ進んでいける力を得る。

5. 刷新性 (Innovation)

既存の社会に適応する力ではなく、未来の社会を創造する力。既存の枠組み、発想の仕方、方向性そのものを刷新し、転換する。ESD は、教育の再方向づけ (Re-Orientation)。

6. 協働 (Collaboration)

教師の間での協働、児童生徒や保護者との協働、多様なステークホルダー (地域、家庭、NGO/NPO、企業) との協働。国内や国外の学校と相互に連携し学びあう活動も積極的に展開している。

7. 変容 (Transformation)

学ぶということは、自分が変わるということ。「変容」とは、深い変化である。連続的に右肩上がりで成長する変化というよりも、変化の前と後とで、自分が変わり、ライフスタイルが変わり、価値や態度が変わるような深い学び。

8. 広がり (汎用性) (Scalable/Replicable)

自校の実践を自校だけにとどめず、他の学校でも活用することができるように、積極的に共有して広める活動、一般化したり理論化したりする取り組みに参加しているか。

公募要項に、はっきりとこの8つの基準を明記したので、応募してきた学校は、これを念頭において実践を紹介する書類を整えていた。審査委員の5名が各々、基準ごとに申請書類を採点した結果、5人の中のバラつきは少なく、スムーズに24校が選ばれた。応募した4つのNPO法人立の学校は、この基準であれば当然のように、上位での入選となって存在感を示した。刷新性や変容を生み出すビジョンが明確であり、それを実現するために自発的に前に踏み出し、学校ぐるみで協働して取り組んでいる学校だからである。

「ホールスクール (機関包括型) アプローチ」

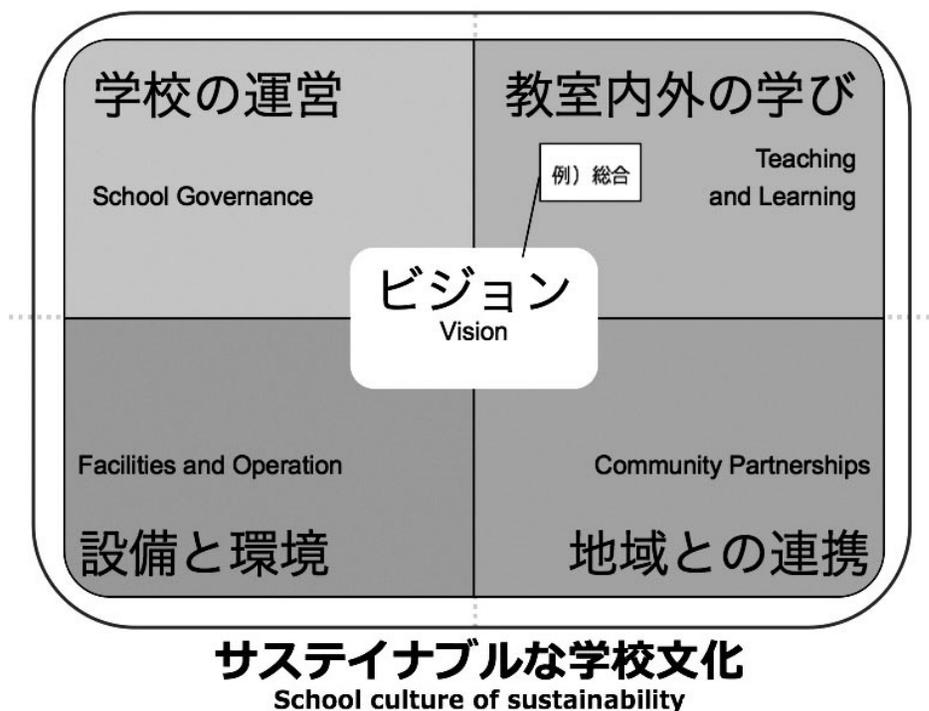
それから1年あまりが経過。今年に入って2月と7月の2回の研修会で、自分たちのESDを「ホールスクールアプローチ」でデザインするワークをした。図1のようなデザインシートに、これまでの、そしてこれからの取り組みを記入し、学校全体で取り組むESDへのアプローチを可視化する。これ

は、ユネスコ本部が推進する気候変動をテーマにした国際協働プロジェクトが提示した指針をベースに、私たちがアレンジしたオリジナル・バージョン。この国際プロジェクトに日本からは、サステイナブルスクール 24 校のうち本校を含む 10 校が参加。さらに、昨年 11 月にセネガルであった国際会議に、横浜シュタイナー学園の内村真澄先生が日本代表で出席した。その私たちへの報告（演劇仕込みのプレゼン！）も素晴らしく、その指針を発展的に受け継ぐ契機となった。

このデザインシートは、一般の公教育学校にとっては、学校は上から与えられるものではなく、全ての構成員が学校ぐるみでデザインし創り出すものだということを学ぶツールとなっている。もちろん、「親と教師がともに創り続ける学校」である京田辺シュタイナー学校にとっては、開校以来ずっと大事してきたことだろう。つまり、この図の 4 象限の、右上の「教室内外の学び」は教師会が専らに担うけれど、「学校の運営」も「設備と環境」も「地域との連携」も、本校では保護者が教員と協力し合って担っている。サステイナブルスクールでは、授業の中に ESD を取り入れる、というのは 4 分の 1 に過ぎない。むしろそれ以外の 4 分の 3 を含めた学校づくりの全体の中に、サステイナブルな価値や行動様式を浸透させていくことこそ、本当に持続可能な学校になっていくために大事だということが強調されているわけだ。それをユネスコ・ESD でも、「ホールスクールアプローチ」というかたちで、今ホットに取り組もうとしている。

平成 29 年度日本 / ユネスコパートナーシップ事業
ESD 重点校形成事～輝け！サステイナブルスクール～
【 学校名】

図 1 「ホールスクールアプローチ」デザインシート



サステイナブルな学校文化を培う

もう一つ、この図1の下段に「サステイナブルなスクール文化 School culture of sustainability」と記されていることにも注目しておきたい。あれやこれやのESDの実践が地道に積み重ねられていて、結局のところ「ああ、学校のなかに、何かしら、サステイナブルな文化と呼べるようなものが培われたね」と言えるところまで辿り着いたとき“そのときやっと本物になる”という感じのことだと捉えている。「経済」や「政治」の次元だけではなく、「文化」（価値や精神）の次元が、ESDの教育を根底で支えるものであることを、ユネスコはしっかり見据えている。（この点は、紙幅の関係で『持続可能な教育と文化』せせらぎ出版、および『サステイナブルスクール～ホールスクールアプローチで描く未来の学校』ACCU（HPからダウンロード可）62頁の拙稿を参照）

このようにサステイナブルスクールは、これに先立つ中村真理子先生の報告にもあるように、シュタイナー学校が大事にしているものと響き合うことが、驚くほど多い。イギリスのサステイナブルスクール（アシュレイ校）の7原則もそうで、それとシュタイナー教育との関連について、いま真理子先生は公教育学校の先生たちにも発信できるように整理したレポートを自らまとめてくれた。ありがたいことで、これからの研修会などの折に、広く共有していくことができることと思う。

さて、研修会などでは公平さが求められる事業推進委員としては、シュタイナー学校の当事者としての立場は極力抑制しつつ、遠目に本校の存在を客観視してきたが、だからこそ気づけたことがある。あるいは、思い入れを抑制しきれずに、溢れ出そうになった思い（——あらためて惚れ直してしまった思い）がある。『プラネッツ』では許されよう。ここまで書いてきたことを3点にまとめながら、皆さんと分かちあいたい。

本校がサステイナブルスクールの仲間に入った意義

1.

文部科学省の委託事業のなかで、国公立とNPO立の学校が、垣根を超えて学び合う貴重な機会ができた。そこではNPO立のシュタイナー学校が、参加した先生が自然体で活躍してくれていて、存在感のある役割を果たしている。お互いの学校を訪問し合って学び合うことも始まっている。

2.

サステイナブルスクールの指針の一つが「ホールスクール（機関包括型）アプローチ」。それは本校の「親と教師がともに創り続ける学校」という校是と重なり合う。サステイナブルスクールとしての学校づくりは、保護者の担えることも多い。構成メンバー全員での運営はもちろん、校舎校庭などの環境づくり、地域に根ざした学校など、皆で出来るところから取り組んで、じっくり時間をかけて「サステイナブルな学校文化」と呼べるような熟成した文化を今後も培っていききたい。

3.

この京田辺の地で行われているシュタイナー教育の経験を、ここだけのものにとどめておくのは勿体ない。シュタイナー学校は、もはや、わが子のため、自分たちの子どものためだけの学校ではなく、事例でもって広く社会に貢献できる公益性をもった存在に成長してきた。学校の中だけに目を向けていると、まだまだ不十分なところもあれこれと見えることだろう。でも他方で、世界に目を向け、日本の教育を刷新していく大きな流れにまで視野を広げると、ここでこれまで蓄積してきた経験知は、とても貴重なものだ。それを他の公教育学校とも分かち合えるよう、サステイナブルスクールの仲間のようなつながりを、少しずつでも育んでいきたい。制約の多い条件のなかでも果敢にチャレンジしている幾つもの公教育学校から、私たちが学ぶこともまた多い（今本校で取り組もうとしている、持続可能な教育活動のための教員の『働き方改革』もしかり）。

パブリックに開かれた学び合いのなかで、本校が公共性を高め、この社会のなかにしかり根を下ろした存在となること。それは、本校自身の成長プロセスにあって、ある時点から、すでに大切な課題になっているように思う。あるいは最初から、いずれそうして未来を創造する存在になることが、大切なミッションであったのかもしれない。

「内への深まりと外への広がり — 世界と出会い、学ぶことを通して徐々に自分にも目を向ける。やがて世界を広げていくことで自分の内をも深めていく。こうして自らの歩むべき道を選び取り、人生を切り拓いていく力を培う。その上で、人や社会とつながり、新しい未来を創造していく人となる。」

（本校「教育ヴィジョン」より）

ひとりの人の今生のミッションが、その時その人が意識できている以上の大きさで、天から賦与されていることがある。ちょうどそのように、ひとつの学校の地上に存在したミッションが、今は十分に意識できていない大きさで与えられていることもある。そういうこともあるのかもしれないと、ある会合のある瞬間に気づかされたように思った。とまれ、そう直観した瞬間があったことだけは、私にとっては明晰な事実である。